

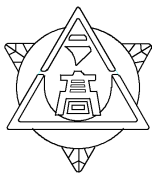
平成 2 7 年 度

研 究 紀 要

創

第 1 8 号

TSUKURU



北海道今金高等養護学校

巻頭言

本校では、平成24年度から研究主題を『社会の変化に対応できる力を育てる実践的研究～「今養版キャリア教育」の創造を目指して～』とし、3カ年計画で第6次研究に取り組みました。その研究成果として、本校の生徒の障がいや発達の状態、課題の特徴を踏まえ、独自のマトリックスとして「今養版キャリアプランニングマトリックス」（以下、「マトリックス」という。）をまとめました。また、マトリックスに基づいた教育課程の見直し、生活単元学習における「心とからだの学習」の指導段階表に基づいた授業計画の作成や実際の授業を通じた検証、卒業生の就労先へのアンケート調査や事例調査に基づいた指導課題の明確化、作業学習における評価様式と指導の在り方を見直しを行いました。そして、これまでの研究成果の普及と中高一貫したキャリア教育の実現に資することを目的として『キャリア教育のすすめ』という冊子を発刊し、道南の各中学校の特別支援学級に配布しました。

しかし、マトリックスが作業学習には使いやすいものの、生活単元学習では使いづらいなど、マトリックスそのものの見直しの必要性も指摘されました。また、進路指導部が卒業生の就労先への調査研究を行った結果、卒業生の課題として、「コミュニケーション能力の弱さ」や「生活の自己管理の弱さ」が挙げられており、このことへの対応が緊急な課題として浮き彫りになりました。

そこで、今年度から「卒後を見据えたキャリア発達を促す指導法の研究～協同学習と生活指導の充実を目指して～」に3カ年計画で取り組むこととしました。

知的障がい教育においては、生徒の学習上の特性として、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくいこと、実際的な生活経験が不足しがちであることなどから、实际的・具体的な内容の指導がより効果的であると考えられています。また、個人が自分の認知に関して有する知識あるいは過程であるメタ認知に課題があるため、経験を振り返って点検・評価したり（メタ認知的モニタリング）、相手の状況に応じて目標や行動を修正したりする（メタ認知的コントロール）ことには課題があり、意図的・計画的なメタ認知に関する指導が必要です。コミュニケーション能力に関しても、实际的・具体的な内容を取り扱う場面でのコミュニケーションを必要とする課題や場の設定、学習活動の展開により、時間はかかっても生徒のコミュニケーション能力は高まっていくものと考えます。

また、生徒が主体的に課題とその解決のための活動に取り組んでいるときこそ、学習経験が能力や知識・技能、態度などの確実な習得と形成につながります。

アクティブ・ラーニングの一つである「協同学習」は、知的障がい教育の実践研究では多くは取り組まれてはいませんが、個々の生徒のコミュニケーション能力や思考力の実態を踏まえて、実際の具体的な課題について、説明し合ったり、話し合ったり、助け合ったり教え合ったりすることやメタ認知に焦点を当てた指導を展開することにより、コミュニケーション能力やメタ認知力は高まるものと考えます。

今年度は研究初年度として、「協同学習」の共通理解を図り、「協同学習」をどのように授業で活用するのかについて、授業の主担当者全員が授業研を通して実践的な検討を行いました。「協同学習」の授業作りは始まったばかりであり、研究紀要の内容を見ても十分ではない点が散見されます。課題となる事項については、来年度の研究において「協同学習」の観点からの授業作りの充実に努めて参りたいと考えます。

校内研究の推進に当たっては、引き続き本校の研究アドバイザーとして、北海道教育大学函館校の北村博幸准教授に、本校まで足を運んでいただき、重要かつ示唆に富む御助言をいただき、研究を推進することができました。深く感謝申し上げます。また、道内の特別支援学校の公開研究会に参加させていただいたほか、学校の視察も行わせていただくことができ、キャリア教育に関わる教育課程の編成や授業実践などについて多くのことを学ばせていただきました。改めて深く感謝申し上げます。

本研究は、知的障がい教育におけるキャリア教育の創造という大きなテーマに「協同学習」の観点と生活指導の観点から迫ろうとするものです。また、これまでの実践研究の着実な積み重ねに基づいて現時点で整理することができた「今養の教育」の成果でもあります。是非、忌憚のない御意見と御助言をいただければ幸いです。また、今後とも本校への御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年3月

北海道今金高等養護学校長 高 嶋 利次郎

目 次

<巻頭言>

第 1 章	研究の全体像	．．．．．	3～8
第 2 章	課題研究	．．．．．	9～105
第 3 章	寄宿舍の研究	．．．．．	107～150
第 4 章	プロジェクト研究	．．．．．	151～172
第 5 章	研究の成果と課題	．．．．．	173～175
第 6 章	特別支援教育研修会	．．．．．	176～189

<あとがき>

<共同研究者>

第1章

研究の全体像

1 本校の校内研究について

本校では、1つの校内研究主題に基づいて取り組む「課題研究」「プロジェクト研究」「調査研究」「寄宿舍の研究」の4研究があり、それぞれが関連している。

課題研究

本校の研究の中心的研究と位置付けている。本校における教育実践等のニーズの優先度などに応じて設定された実践研究であり、日常の指導実践と最も密接に関連する研究である。

寄宿舍の研究

寄宿舍研修部を中心に、校内研究主題及び学校が行う上記3研究の流れに沿う形で取り組むものと位置付けている。また、研究推進委員会を通じて学舎の情報交換や連携を図っている。

調査研究

文字通り、調査による研究である。校内外における教育実践等に関する情報を、資料・統計として調査及び研究するものであり、研究内容に関する専門性の高い部署が担当する。取り組みについては年度当初に検討して決定している。

プロジェクト研究

課題研究だけでは解決できない課題、もしくは別の課題を解決するために、その課題に関係する組織で進めるものと位置付けている。学校教育の動向や本校における教育実践等のニーズに基づく緊急の課題に関する実践的・総合的研究であり、校内部署の横断的なプロジェクトチームを編成して実施することもある。取り組むべき課題があるかどうか、どういった組織で取り組むかといったことは、年度により異なる。

図1 本校の校内研究

4つの研究を進めるそれぞれの研究組織は、研究主題や内容によって変化する（表1）。また、研究の方法としては、理論研修（学習会）、研究授業、事例検討、教材教具の開発・工夫などがある。各研究組織は、研究の内容に合わせて方法を選択し、ときには組み合わせている。

表1 本校の校内研究のあゆみ

	研究主題	概要（主な研究内容）	研究の種類（研究組織）
第1次	【平成9～10年度】 生徒一人一人の発達段階・特性等に応じ社会参加・自立を促す教育課程の編成はいかにあるべきか	教育目標の具現化、教育課程の基本方針、指導内容の選択・組織、個別指導計画の作成、地域環境・素材を生かした教育活動	・課題研究（形態部会、教科部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舍の研究
第2次	【平成11～13年度】 生徒一人一人が自立し、社会参加できる力を育む授業づくりと教育課程の編成はいかにあるべきか	教育課程の編成、授業の実践と検証、個別指導計画の充実、現場実習及び進路状況の把握	・課題研究（形態部会、教科部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舍の研究

第 3 次	【平成 14～16 年度】 生きる力を育む指導の研究	総合的な実態把握、指導課題の具体的 設定と指導内容の関連、単元・題材指 導計画の工夫、個別化と集団化が最適 化された授業作り	・課題研究（学年部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 4 次	【平成 17～20 年度】 授業作りに活かす、教師の専門性の向 上を追求する実践的研究	課題単元の教材開発、作業工程分析の 充実、個別的教育支援計画等の様式及 び作成に関する研究、体力つくりの見 直し	・課題研究（形態部会） ・P 研究（CO+進路部代表、 体力づくり部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 5 次	【平成 21～23 年度】 社会参加・自立を目指した働く力の育 成	教科及び領域・教科を合わせた指導の 授業研究、体力つくりの見直し、指導 内容表の検討、教育支援計画・指導計 画・通知表のあり方の整理	・課題研究（学年部会） ・P 研究（体力づくり部会、 研推委、指導計画 WG） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 6 次	【平成 24 年～26 年度】 社会の変化に対応できる力を育てる 実践的研究	キャリア教育の指針「今養版キャリア プランニング・マトリックス」の作成、 指導内容表の検討、作業学習評価の見 直し、教育課程検討、校内組織検討、 事例研究	・課題研究（形態部会） ・P 研究 ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究

（P はプロジェクトの略 / CO はコーディネーターの略 / WG はワーキンググループの略）

校内には教務側の研修部と舎務側の研修部と 2 つの研修部が存在し、校内研究の企画・推進は、互いの研修部が連携し合い、研究主任が調整を図りながら行っている。研修部員も委員となっている研究推進委員会は、4 つの研究が相互に連携して推進されるよう、必要に応じて連絡・調整する、いわばコーディネーター的役割を果たしている。（図 2）

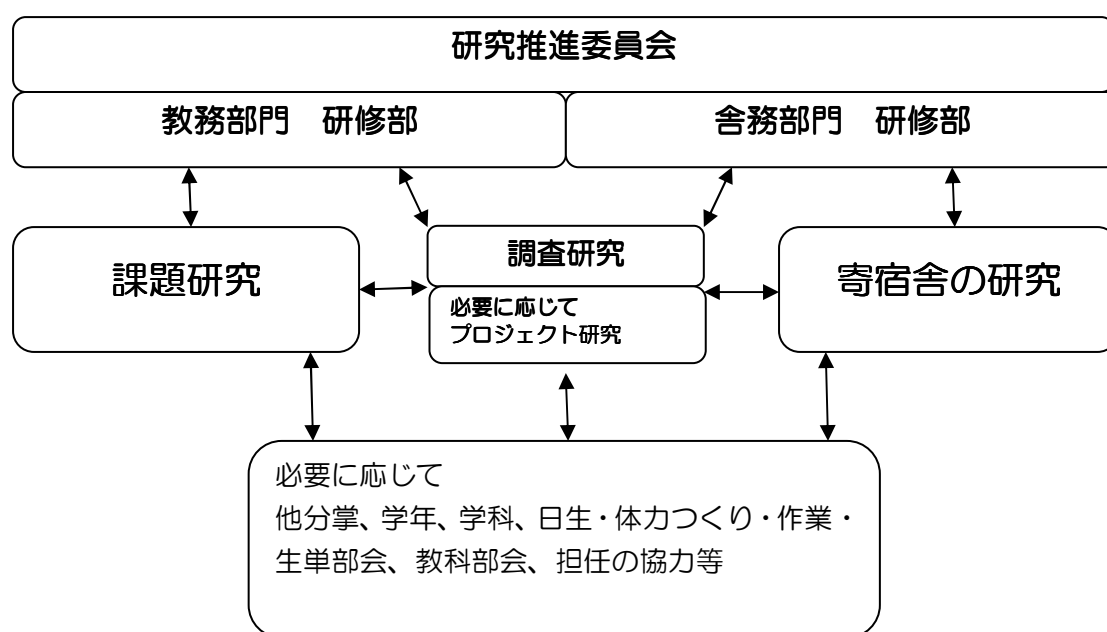


図 2 本校の校内研究組織

2 第7次研究について

(1) 研究主題

卒後を見据えたキャリア発達を促す指導法の研究

～協同学習と生活指導の充実を目指して～

(2) 主題設定の理由

本校は職業教育を行う高等養護学校として、平成9年に開校した。生徒の実態や社会情勢の変化に対応しつつ、作業学習と生活単元学習を中心とした教育課程の基で指導を行い、平成27年3月31日現在、357名の生徒が卒業し、社会人としての人生を歩んでいる。

第6次研究（平成24～26年度）では、「本校としてのキャリア教育の進め方」をもとに、3年間行われた。3年間の系統的な教育目標を「今養版キャリアプランニング・マトリックス」（以下、「マトリックス」という。）としてまとめ、マトリックスに沿って、教育課程や指導の系統性、評価の取り組み方について検証した。その結果、指導段階表を作ったり、新たな評価様式を使ったりするなどの成果が見られた。しかし、研究グループごとに、マトリックスの使い方に対して、具体的に授業実践にどう使っていけばいいのか、また使いやすようにマトリックスの見直しの必要があるのではないか、など様々な意見が出された。マトリックスはキャリア教育の指針を示しており、普段の実践に生かしながら、活用していくことが求められる。マトリックスの活用や見直しについては、プロジェクト研究として教育課程検討委員会が中心となって進めることとした。

ところで、本校では進路指導部が中心となり、卒業後の生徒のフォローアップを続けている。進路指導部が実施した調査により、卒業した生徒の姿の一端が見えるようになった。第6次研究で行われた調査研究では、代表的事例として、3つの報告がなされた。それによると、卒業後の生徒が困っていることに「障がい受容の不足」「コミュニケーション能力の不足」「性の指導（異性関係の課題）」「自己認知」が挙げられていた。（本校研究紀要「創」2015）

特に、どの事例でも共通して「コミュニケーション能力の不足」が挙げられていた。具体的には「言葉などによるコミュニケーションを学ぶ機会を逸してきた。」「他人との関係を従属的（強い者に従ってしまう）、共依存的（自分を守るために特定の人に関わる）でしか築くことができない。」などが示されていた。ここにはコミュニケーション能力のみならず、自分に対する自信のなさ、評価の低さも関係していると考えられる。

調査研究では研究の成果として、コミュニケーション能力の向上が課題とされ、授業改善の方法として「協同学習」という学習方法を授業に取り入れることで、生徒は苦手意識をもつことなく、コミュニケーション能力や関わる力を高めることができるのではないかという仮説がまとめられた。

コミュニケーション能力や人と関わる力を高めるためには生徒が対人関係上の成功体験を積み重ね、本人がよかった点と改善すべき点、自己評価できるようにすることが大切である。そこで集団の中でのコミュニケーションや関わりが学習活動中で大きなウェートを占めている「協同学習」

に注目した。「協同学習」がどのような学習であるかを示すと、

- ・『『集団の仲間全員が高まることをメンバー全員の目標とする』ことを基礎においた実践すべて。』
 - ・「学級のメンバー全員のさらなる成長を追求することが大事なことでと全員が心から思って学習すること。」
 - ・『『学び合い・高め合い・認め合い・励まし合う』学習活動を協同学習だと言うこともできる。』
(以上、杉江, 2011)
 - ・「協同とは、共有された目標を達成するために一緒に取り組むことである。協同的な事態では、ひとりひとりが自分自身の成果を追求すると同時に、グループの仲間全員のためにもなるような成果を追求する。協同学習は、生徒たちがともに課題に取り組むことによって、自分の学びとお互いの学びを最大限に高めようとする、小グループを活用した指導方法である。」(Johnson 2002)
 - ・「生徒たち同士や、生徒たちと教師との相互コミュニケーションを促進し、共通の問題解決を目指してお互いの考えを積極的に出し合うことで、学習内容の理解・習得や新たな創造や発見を行うという、話し合いや助け合いを中心とした授業づくり」(原田, 2009)
 - ・「協同学習は、協力しないとできない課題や目標の設定を行うことにより、学力のみならず、社会性や仲間関係の改善に効果を上げている教育技法」(涌井, 2015)
- などとなる。つまり、協同学習は、生徒たち同士や生徒たちと教師との相互のコミュニケーションを促進し、共通の問題解決を目指してお互いの考えを積極的に出し合うことで、学習内容の理解・習得や新たな創造や発見を行うという、話し合いや助け合いを中心とした授業づくりといえる。

協同学習は、メンバー全員の成長を願いながら行われるものである。つまり、学び合いながらコミュニケーション能力を高めることにつながるだけではなく、相手も自分も認め合い、従属的または共依存的な関係とは異なる関係を築きながら学習を進めることにつながるのではないかな。そうすることで、「コミュニケーション能力の不足」の問題を解決するヒントを見つけることができるのではないかな。

もう1つ注目したのは、「異性関係の課題」とともに考えられる「生活に関わる問題」である。卒業後の生活で崩れないようにするには、自己管理能力の向上と維持が重要なのではないかな。

生徒が卒業後に抱えている課題の解決を、生徒自身が取り組むことができるようにする。そのためには、授業または生活場面において、生徒が課題を解決することができるように、生徒が自分で考える場面を少しずつ、意図的に取り入れていく必要があるのではないかな。

このような状況と考えをもとに、授業では「協同学習」を、寄宿舎では「自己管理能力」と「生活指導」をキーワードに3年間（平成27年度～29年度）をかけて、卒後の課題解決につながる実践を探ることとし、本校の学校教育目標である「豊かな心と体をつくり、努力する生徒を育てる」の実現に向けて、主題を設定した。

引用・参考文献

- ・杉江修治（2011）「協同学習入門 基本の理解と51の工夫」 ナカニシヤ出版
- ・原田信之（2010）「学級を『学びの共同体（ラーニング・コミュニティ）』にするための協同学習」平成19～21年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)学級を「学びの共同体」にするための教師の力量形成プログラムの開発研究成果報告書
- ・吉田新一郎・岩瀬直樹（2007）「効果10倍の〈学び〉の技法」 PHP 新書

- Johnson, D. W. , Johnson, R. T. , & Holubec, E. J. (2002) *CIRCLES OF LEARNING: Cooperation in the classroom* (5th edition) Interaction Book Companu, Edina, MN (ジョンソン, D. W. , ジョンソン, R. T, ホルベック, E. J.、石田裕久、梅原巳代子(訳)(2010)「改訂新版 学習の輪 学び合いの協同教育入門」) 二瓶社
- 涌井恵 (2014)「学び方を学ぶ」 ジアース教育新社
- 涌井恵 (2015)「学び方にはコツがある！その子にあった学び方支援」 明治図書